

記述的エピソード法を用いた行事型森のようちえんの実践報告

水谷亜由美*・今村光章

*はしま西幼稚園（奈良女子大学大学院）

Report on the practice of “event type of Waldkindergarten”
by using the methodology of the descriptive episode.

Ayumi MIZUTANI and Mitsuyuki IMAMURA

はじめに

本稿の目的は、記述的エピソード法を用いて、行事型森のようちえんの教育実践を報告することである。すでに記述的エピソード法を用いる意義については、別のところで述べたので繰り返さない（今村, 2010. 今村ら, 2011a. 今村ら, 2013）。

もとより、記述的エピソード法は、量的把握や統計的な方法ではないため、実証性や主観性が問題視されることはある。だが、全国的にみても森のようちえんに関する実践報告の先行研究はごくわずかである。こうした方法で、報告すること自体に意義を見いだしたい。加えて、森のようちえんの保育について、保育者が平易な言葉でまとめたエピソードを報告することで、保育の営みの振り返りができるように考えられる。そこにも報告の意義を見いだしたい。

他方、森のようちえんや行事型の森のようちえん、ならびに、「ぎふ☆森のようちえん」についても、別のところで詳しく述べたので繰り返さない。また、森のようちえんそれ自体についての説明も他所で述べたので繰り返しを避ける。（水谷・今村, 2011.今村, 2011b. 今村, 2011c. 今村・水谷, 2011d.）。ただし、本稿の研究対象である行事型森のようちえんの「ぎふ☆森のようちえん」について、ごく簡単に述べておこう。

「ぎふ☆森のようちえん」は、通年型の森のようちえんとは異なり、月に一回、子どもたちを集めて自然体験型の保育を実施するボランティア団体である。幼児（3－6歳児）および小学生（1－4年生）は登録制で、同じ子どもたちが参加する。幼児の指導者は、現職・元職の幼稚園教諭、岐阜大学大学院教育学研究科の大学院生、および学生、その他一般市民のボランティアである。活動場所は岐阜駅からバスで40分程度のキャンプ場である「ながら川ふれあいの森」（岐阜市三田洞）である。活動内容は、主として自然遊びである。葉っぱのにおいをかいだり、バッタを追いかけたり、寝転んで空を見上げたりする。

以下では、今村が代表を務め、水谷が保育者となって実践している「ぎふ☆森のようちえん」でのエピソードを紹介する。素朴な実践報告ではあるが、単なる記録ではない。〈考察〉の部分には、これからの森のようちえんの保育を考えるヒントが隠されている。また、ここで取り上げるそれぞれのエピソードには、一見、関連がないようにも思われるかもしれない。だが、森のようちえんの保育の特色という点ではつながっている。

なお、エピソードの〈背景〉と〈エピソード〉は水谷が執筆し、今村が加筆修正した。〈考察〉については、両者の協議により共同で執筆した。なお、エピソードにあるのは、すべて仮名である。保育スタッフは、幼児の指導者や森の案内人、ボランティアの保護者、など様々であるため、指導者と

いう用語で統一した。ただし、学生ボランティアのみ、学生スタッフと表記した。

I 森のようちえんのエピソード

エピソード1 「捕まえた沢ガニは持って帰っちゃダメ？」——生命とどう向き合うか

<背景>

真夏の森のようちえんのことである。

昆虫や植物に興味津々のけん君。生き物が大好きで、容易に捕まえて自慢げに見せにくる男児である。この日も、朝からナナフシギを手を持ってはしゃいでいた。生き物があると聞くと、勢いよく走っていき姿が見られていた。また、以前から、見つけた物をお父さんやお母さんに見せたいという気持ち強い。草花や昆虫を見つけると必ずビニール袋に入れて持ち帰っていた。

<エピソード>

「なんかいるよ！」はる君が大声で叫んでいた。その声を聞きつけ、子ども達は勢いよく駆けよっていった。そこには、必死になって手を伸ばし、沢ガニを捕まえようとするけん君の姿があった。カニのはさみに畏れながらも、おっと指でつまみ上げようと試行錯誤していた。しばらくすると、やっとの思いで身体を持ちあげ、得意げにみんなに見せて回っていた。その後、けん君は木の上にカニを載せて、いとおしそうに動く様子を見つめていたのだった。

帰宅時間になると、けん君は水を入れた袋の中に、沢ガニをつまんで入れた。持ち帰るつもりであるようだ。そのため、「自然に返さない？」という指導者の言葉に、顔が曇った。「嫌だ。持って帰る」とカニの袋をギュッと握りしめていた。自然の物は自然に返そうと考えていた指導者は、「カニさんにもおうちがあるんだよ。お父さんがいるんじゃないかな？」と伝えると、けん君は困惑した表情を見せていた。

<考察>

森の自然の中にいる動植物すべてに命があり、生きている。生き物一つ一つに生きる場所があり、人間が手を出すべきではない。自然と共に生きる大切さをどのように子ども達に伝えていくべきか、考えさせられる契機となった。

けん君にとって、沢ガニの獲得は自慢できる経験である。初めて見た沢ガニに心を躍らせ、興奮していた。自分で捕まえたからこそ愛着があり、ずっと自分の手元に置いておきたいと思うのは子どもにとって自然である。

けん君が、当然自分の家に持ち帰ることができると思い、袋に入れて用意していた行為も納得できた。けん君の困惑した表情から、指導者から森に返すよう忠告され、葛藤していたことがよく分かった。<嫌だ。このカニは僕のものだ>という気持ちと、<カニさんもおうちに帰りたいよね>という気持ちで揺れていたと思われる。

子どもが生き物を持ち帰ろうとするのは、生き物に興味を持っている証拠である。自分から自然に働きかけ、生き物との出会いを楽しむ姿は喜ばしい成長だ。だが、同時に、生き物の命を守る大切さを伝えていく必要性和難しさを実感した。自然の物は自然へ返す。大人にとっては当たり前のことでも、子どもにとっては理解しがたい。<落ちていたドングリや葉っぱは拾うのに…なぜ？><せっかく取ったカニをお父さんに見せてはいけないの？>など、納得できない思いが込みあげている。どのように子ども達に伝えていこうか。今回はとても悩みながらの声かけとなった。

森のようちえんでの生命の扱いは、簡単に解決することではない。けれども、何人もの大人から声をかけられ、けん君はカニの命について考えることができた。見つけた生き物をどのようにするかは、今後も森のようちえんで考えていくべき課題である。様々な生き物との出会いを通して、生き物の命について、そして、共に生きていくことについて、子ども達と一緒に考えていきたいと思う。

また、ぎふ☆森のようちえんでは、子どもが野に咲く花を摘んでも構わない。だが、子どもが、幼稚園や保育所で、栽培されている花を摘むと叱られてしまう。原理の違う場所で、子どもたちが混乱せずに生きていくための配慮をする困難さと直面する。そうしたことを考えさせられるエピソードであった。

エピソード2 「こっちにいるよ！」——五感を研ぎ澄ますことを学ぶ

<背景>

ゆう君は、草木や花、昆虫に大変興味を持っている。おもしろい物を見つけると、すぐに駆けだし、じっくりと観察する様子が見られていた。4月から継続的に参加をしており、自分で遊びを見つける力を身につけている男児である。

この日も、ゆう君は、出発時から昆虫や草花を見つけていた。周囲の友達がどんどん前へと進んでいることを全く気にする様子はなく、自分のペースで遊びながら歩いていた。

<エピソード>

ゆう君は、クモを見たり、木の葉っぱを触ったりしながら、ゆっくり歩いていた。クラスの友達はまだ見当たらない。ずっと先を歩いていってしまったようだ。<はぐれてしまったは大変>と思った私は、「ねえ、ゆう君、みんな見えなくなっちゃったね。どうする？」と声をかけた。ゆう君はハッと、あたりを見渡した。さらに私は、分かれ道を指差し「どっち行ったのかな？ゆう君、どう思う？」と尋ねた。すると、ゆう君は慌てた様子で私の口を塞いだ。「だめだよ、しゃべっちゃ！」と真剣だった。ゆう君は、耳を澄まして、音を聴いていたのである。

「しー」と指を口元に置き、目をきょろきょろさせながら周囲の様子を伺っていた。そして、「こっちにいるよ！」とささやくように私に話すと、ものすごい勢いで走りだした。その後もゆう君は、道が分からなくなると立ち止まり、耳を澄まして友達の場所を確認して進む。やっとの思いで追いついたゆう君は、汗をびしょりかきながら友達との再会を喜んでいた。

<考察>

じっと耳を澄ませて音を聴くゆう君。幼稚園生活などで、視覚からの情報に頼り、普段忘れてしまっている音、人の話声中に着目するゆう君にハッとさせられた。音を聴くことの大切さ、おもしろさに気づかされると同時に、耳から入ってくる刺激に敏感に反応する力の育ちを感じた事例だった。

ゆう君は、好奇心が旺盛で、目の前にある物全てに驚きと発見を見出している。そのため、森を歩く道はおもしろい物ばかりであり、なかなか前と進むことができなかった。気がつくと、クラスの子ども達はどんどん目的地へと歩み続け、見えなくなってしまう。<ゆう君の興味を大切にしながらも、集団から大きく離れていることは避けたい>と思い、私は、声をかけた。ゆう君の反応は、話し声を頼りに進むという大変興味深いものだった。ゆう君は、口をぎゅっと結び、真剣に耳を澄ましていた。時には、目を閉じて聞き入っている姿もあり、必死に音を聞き分けようとしている姿が見受けられた。

私（水谷：当時は幼稚園教諭）はクラスの集団を探す時、つい、目で人の姿を見つけ出そうとしてしまう。今回も、片方の道を覗き込み、子ども達が歩いているか確認しようと思った。従って、ゆう君の耳を澄ます姿を見て、音を感じることに素晴らしさにハッとさせられたのだった。

私達は普段の生活には、多くの音声情報であふれている。様々な音が鳴り響き、人の声を聞き分けることも難しいときもある。また、視覚的な情報もあふれかえり、目で見て判断することが多い。だが、森の中で目を閉じて見ると、鳥の声、セミの鳴き声、人の話し声、足音、水が流れる音が鮮明に聞こえてくる。時にはシーンとした音がない場面にも遭遇する。そのような自然の音しかない森の中だからこそ、ゆう君は音を頼りに道を探す行為をとった。

友達を探す時に、「あっ、鳥もこっちにいるね」と話していたことから、音を聞く楽しさ、音から

見つける喜びを味わっていると見て取れた。今回のやり取りを通して、ゆう君は森での体験の中から音を聴く大切さ、おもしろさを学びとっていたのだと気づかされた。

森の中で、子ども達は音を感じ取っている。視覚情報だけではなく、耳で聴く音も楽しんでいる。自然な音があふれる森、時には何も聴こえない森では、子ども達が音を聴く力が研ぎ澄まされていくのである。これも森のようちえんならでの経験ではないだろうか。

エピソード3 「これだよ、これ！」——科学的に物を見る基礎を培う

<背景>

ゆう君とかず君は、森の中にある物に強い興味を示している。大好きな昆虫を見つけたり、知らない物を発見したりするとすぐに駆け寄り、見に行く姿が見られていた。熱中すると立ち止まり、じっくりと見つけた物を観察して遊んでいる。見つけた物を友達と見せあったり、見つけた事物と会話をしたりして楽しむ男児らである。

散歩を始めると、早速カマキリを捕まえたり、きのこをとったり、どんぐりを集めたりと森の秋探しに夢中になっていた。1, 2歩歩いてはおもしろい物を見つけて立ち止まり、観察してから再度歩き出すという行動を繰り返していた。

<エピソード>

「ねえ、ねえ、これじゃないよ」「僕が見るよ」私は、子どもの言い合う声を聞きつけて振り向くと、ゆう君とかず君が、必死になって図鑑を覗き込んでいた。頭を寄せ合い、次から次へとページをめくっている。見つけた虫がどのような虫か探しているようだった。虫を横に置いて、見比べながら探している。2人は「これじゃないかな」「ちょっと違うよ」と話すと座り込み、さらに真剣に図鑑を見始めた。他の子が前へと進んで行っても全く気にしない。しばらく座ったまま、探し続けていた。

そして、森の案内人さんにも見てもらい、やっとの思いで探し当てた。「これだよ、これ」と嬉しそうに図鑑を見せてきた。バッタ、コウロギの種類が分かり、満足した様子である。図鑑で得た知識を友達にも話し、得意げであった。その後も、分からない樹木や花、生き物を見つけると、すぐに図鑑を借りに行き調べ、結果を話す姿が見られた。

<考察>

森の中では、実際に見た生き物、植物を図鑑で調べ、喜びを味わうと同時に知識を身につけていくことができる。室内で図鑑や絵本を見ているだけでは分からない生きた体験を楽しむ子どもの姿が見られたエピソードである。

草花や昆虫に興味津々のゆう君とかず君は、何か分からないことがあるとすぐに森の案内人さんに尋ね、図鑑を見ようとしていた。<図鑑には自分の分からないことが載っている。森の案内人さんは何でも教えてくれる>と思っているようである。子どもたちの「知りたい」という強い探究心が伝わってきた。実際に目の前にある物と比較しながら調べていくことができ、「これがあるからメスだね」などと理解を深めていく子どもの姿があった。

さらに、子どもには知ったことは人に伝えたいという気持ちがある。「これはメスだよ」と得意になって伝えることで、周囲の子どもたちにも広がっていく。「どれが？見せてよ」と数人で輪になって眺めている姿がよく見うけられた。興味が薄かった子どもたちも、他児の影響を受けて、昆虫を探そうとする。

図鑑を通して生き物や草花、樹木を学ぶことは、室内でも可能である。一般的な幼稚園でもよく見られる光景である。だが、図鑑を見て頭で理解をしていくことと、実際の生き物を目の前にして図鑑を見ることは違いがある。目で見て匂いを嗅いで、触って確認することができ、五感を通して理解することができるからである。また、分からないことがある時、知りたいことがある時、どのようにして解決をしていくか方法を学ぶことができる。森のようちえんでの多様な動植物との出会いは、楽し

みながら子どもの身の回りを理解していく力、疑問を解決する力の育ち、科学的に物を見る基礎を培っていると考えられる。

エピソード4 「何に見える？」——自由に遊びの世界を作り出していく力

<背景>

真夏の森のようちえんのことである。兄と一緒にさんぼ組の頃から森のようちえんに参加していたあかねさん。森での遊びに慣れており、自分から進んで遊びを作り出す姿が見られていた。好奇心が旺盛で、元気いっぱい走り回っている。虫が大好きで、バッタやミミズ、トカゲを捕まえては喜んで見せていた。また、木の実や木の枝を拾って工作をしたり、ままごとをしたりして落ち着いて遊ぶ姿もある。

この日の中心的な活動は水遊びであった。かばんの中には着替えが入っており、いつもよりも重かった。そのため、歩き始めてすぐに疲れてしまい、下を向きながら仕方なく歩いていた。いつもと異なり、森での遊びにも退屈しているように見えた。

<エピソード>

疲れた様子を見せながらも、ゆっくりと歩いていたあかねさんは、急に立ち止まった。手を引いても、全く動こうとしない。「どうしたの？」と尋ねるが、下をじっと見つめている。そして、顔をあげると、「先生、何に見える？」と言った。急なことで私は、何のことか全く分からなかった。足元には子どもの興味を惹くような昆虫や草花がなかったからだ。「何？」と私は尋ね返した。すると、再び「先生は何に見える？」と言った。「あかねちゃんは何に見えるのかな？」私はもう一度尋ねながら、地面をじっと見直してみた。「えっとね、桜に見えるよ」とあかねさんは応えた。よくよく見ると、足元には大きな石がある。あかねさんは、その石の形が何に見えるのか尋ねていたのだ。

そのことに気がついたちょうどその時、かず君が傍に寄って来た。「何、何？」と興味津々である。「あかねちゃんね、素敵な石を見つけたんだって。あかねちゃんは桜に見えるんだけど、かず君は何に見える？」と尋ねてみた。「うーん。くま！！」とかず君は大声で叫び、「ここが口でしょ、ここが目でしょ」と説明してくれた。大きな石の上に小さな石を並べながら、顔を作り上げていく。その表情はとても楽しそうで、得意げだった。そして、一通り並べ終えた2人は、満足した様子で再び歩き始めたのだった。

<考察>

大人にとっては何もない道に見えても、子ども達には興味深いことがたくさん待ちうけている場所に見る。しかも、一つとして同じ物がない森は、子ども達のイメージを大いに膨らませ、自分なりの世界を広げて楽しむことができる。

あかねさんは、重い荷物を手にして、疲れ切っていた。「疲れた。もう行かない」と座り込んでしまうほどだった。何とかして目的地まで連れていこうと必死になっていた私だった。だが、あかねさんの足取りを軽くしたのは一つの石との出会いだった。ひたすら前を向いて歩いていたら気がつかない石。私は全く気にとめていなかった石である。そのため、始めはあかねさんが何を言っているのか、分からなかった。じっと石を見つめ、石の形から桜のイメージを楽しんでいると気がついた時、あかねさんの想像力の豊かさに目を見開かされた。あかねさんには、目の前にある何でもない石に光が当たり、ワクワクする世界が広がっていったのである。

さらに、かず君の登場により、あかねさんの石のイメージは広がっていった。くまという新たな見方を教えられ、どんどん笑顔になっていった。「こっちが口で、こっちが目で」と言いながら、2人で小石を並べる様子はとてもほほえましいものだった。

森の中にたくさん転がっている石。一見何でもないような石でも、あかねさんにとってはおもしろい物である。さらに、同じものを見ても、あかねさんとかず君では、違うイメージを膨らませ、ストー

リーを展開していた。

子ども達は、既成概念にとらわれることなく、自由に遊びの世界を作り出していく。子どもの想像力の豊かさに驚かされると共に、ただそこに存在しながら子ども達に働きかけていく森の自然のおもしろさに気づかされる体験であった。園や家庭では、遊び方の決まっているおもちゃしか見当たらないこともおおいなか、石で遊ぶことができるのも森のようちえんの魅力のひとつであり、子どもたちはイマジネーションを働かせて、いろいろなものをいろいろなものに見立てることができるようになる。

エピソード5 「そのままでもいいんだよ」——ありのままを受け入れる保育

<背景>

春の森のようちえんのことである。はる君は、この日初めて森のようちえんに参加した。最初は初めての場所にワクワクしていたが、母親と分かれることを拒み、涙を流す姿があった。母親との別れを乗り越えるが、足取りは重く、水遊び場に向かう表情は不安でいっぱいだった。学生スタッフに寄り添われ、クラス集団の輪から大きく遅れをとって水遊び場に到着したのだった。様子を伺うように友達が遊んでいる姿を、口をぎゅっと結びながら眺めていた。

<エピソード>

はる君は、みんながはしゃいでいる水遊び場をそと後にし、一人木の幹の傍へと歩いていった。水遊び場を背にして、アリをじっと見つめている。木の枝でアリをつついたり、指でアリの歩いた跡をたどったりして遊んでいた。最初は、傍にいる私を気にしながらも無言だったが、突然「ねえ、知ってる？アリってね、お口で食べ物運ぶんだよ。ほらほら、見てよ」と自信たっぷりに話し始めた。その後、次々と出てくるアリに驚いたり、アリの巣を作って遊んだりしながら、夢中になってアリとの出会いを楽しむようになった。今まで何も語らず退屈そうにしていたはる君がうそのようだった。「先生、知ってる？」と嬉しそうにアリについての知識を話し始めた。「先生の所にも登ったよ！！」とアリを見つけては大喜びしていた。

やがて、にこにこして遊ぶはる君の傍には水遊びを終えた子ども達が集まってきていた。「何してるの？」と近寄ってきて、いつの間にか一緒にアリを観察する姿があった。「アリがいるんだよ！」とはる君は友達にも声をかけ、しばらくアリとの出会いを一緒に楽しんでいた。

<考察>

はる君は、なかなか心の壁を破ることができず、自分の世界に閉じこもっていた。だが、アリとの出会いをきっかけに友達との遊びを楽しむことができるようになった。森のようちえんの目の前に広がる限りない空間、自由に遊びこめる時間、子どもの思いを温かく受け止める保育が子どもの心を解き放ち、生き生きとさせると実感させられた。

はる君は、今回初めての参加で、活動に対して抵抗を感じていた。初めての場所、初めての先生、初めての友達に戸惑いを感じていた。森の散歩もなかなか足が進まず、水遊びは少し離れた所から呆然と眺めている姿があった。

一般的な幼稚園での活動であれば、一緒に水遊びをするように要求されるだろう。プールサイド等で一人でじっと立っていたならば、保育者や友達も気になってしまう。孤独感を感じやすい。だが、森のようちえんではそのように眺める子どもの姿をありのまま受け入れられていく。広い空間では、どんな行動をしていても目立たない。

時間はたっぷりあるため、自分のペースで行動する様子が温かく見守られていく。子どものやる気、戸惑い、不安、興味をありのまま受け入れられる森のようちえんでは、子どもが安心して好きな遊びに没頭できる。自分が受け入れられていると感じたからこそ、はる君はアリとの遊びに没頭するようになり、保育者や友達に思いを話すようになった。心の壁を破って自己表現するようになったはる君

は、とても明るく安心した表情を見せていた。

一般に、森のようちえんでは、自然な形で子どもは友達との世界や自分の世界を行き来している。「入れて」「いいよ」などというやりとりは見られない。おもしろい物があればいつの間にか集まって来る。他に興味がある物を見つければ、そっとその場を離れ自分の世界に入っていく。はる君の姿を見ていて、自分の好きな遊びに没頭する楽しさと、友達とも共有する喜びを味わうことができる環境が、森のようちえんには整っていると気づかされた。

森のゆったりとした空間と時間、ありのままを受け入れる保育は、子ども達を安心させ、自分の世界を作り出していく。心地よい友達との距離の中で遊ぶことができる。森のようちえんは、子ども達が心を穏やかにして、思い切り遊ぶことができる場所である。

エピソード6 「こちょこちょこちょ！」——心を一体化する経験を積む

<背景>

ひろみさんは、5月は保護者から離れられず、なかなか遊び始められない女兒だった。大好きな木の枝、葉っぱを使って料理ごっこをしたことで保育者や友達と打ち解けていったのだが、人見知りから言葉を話すことは少なかった。今回も、以前一緒に遊んだ経験を覚えており、すぐに駆けよって来たひろみさんだが、見つけた葉っぱや木の実を目の前に突きつけて見せたり、そっと手を握って歩こうと要求する態度が多く、話をすることは少なかった。

<エピソード>

突然、私の頬にふわふわとしたものが触れた。こちょこちょと毛が動き、私は思わず笑ってしまった。「だーれ？」と振り向くと、そこには笑顔のひろみさんがいた。手にネコジャラシを握り、左右に揺らしている。にこにこ私を見つめ、いたずらっぽく笑っていた。「いいの見つけたね」と言うと、ひろみさんは大きく頷き、何度も何度も私の頬をこそぐってくる。私はくすぐったくなり、何度もくすぐすと笑ってしまった。

その後、私も近くにあった葉っぱを手に取り、2人で向き合いながら頬をこちょこちょし合っていた。私の頬をくすぐる時も、くすぐられる時も、ひろみさんはニコニコと笑っていた。そして、「集まって！！」と声をかけられるまで、ひろみさんと私はずっと笑い続けていた。

<考察>

ひろみさんと私は、ネコジャラシを揺らしながら、ずっと笑っていた。いつの間にか、ネコジャラシでこちょこちょする行為に夢中になり、二人で笑い合っただけで心を通わせる経験を楽しんだ事例である。

ネコジャラシを見つけたひろみさんは、自分で触ってくすぐったかったのだと思う。また、以前にこちょこちょとくすぐって楽しかった経験があったのかもしれない。その思いを伝えたいと思い、私の頬にくっつけてきたのだと思われる。いたずらっぽく笑うひろみさんの表情はとても明るく、心を躍らせている様子だった。私もひろみさんも、何か特別に面白いことがあったわけではない。ただこちょこちょと揺れるネコジャラシがくすぐったいと感じ、自然に笑顔があふれていた。肌に触れるネコジャラシは、とても温かく、心地良さも感じた。また、ひろみさんも私もただ笑っているだけで、言葉はなかった。言葉を交わすことなく、ただ笑い合っていた。だが、言葉はなくても心がつながっているような気がした。頬をなでるネコジャラシとひろみさんの表情から、ひろみさんの安心感や楽しさ、一緒に笑っていることの喜びを感じることができた。何度も何度もくすぐって遊ぶ無邪気なひろみさんの笑顔が嬉しく、ずっと一緒にやっていきたいなと思った。そして、気がつくまで無心でネコジャラシを揺り動かしながら笑い続けていた。

ひろみさんと私は、くすぐったくて思わず笑ってしまった。お互いの笑っている様子がおもしろくて、さらに笑いは続いていく。ひろみさんは、頭で考えるのではなく、感じた思いをそのまま表現していた。心から笑っていた。1本のネコジャラシが、ひろみさんを夢中にさせ、私と心を一体化させ

る経験を与えてくれたと考えられる。森の中には、子ども達の心を惹きつける要素が多い。いつの間にか無我夢中になって遊ぶ時間を与えてくれる。ひろみさんと夢中で笑った経験から、森には遊びこむ経験を促す空間であると実感した。

エピソード7 「こんなの平気だよ！」——子どもを信じてあたたかく見守る

<背景>

秋の森のようちえんのことである。

けいじ君は、とても活発であり、元気よく走り回って遊ぶ姿がある男児である。身の回りの事象に強い興味を示し、自分で解決をしようとする姿も見られている。森の中に気になる動植物を見つけるとすぐに近寄り、触ったり、匂いを嗅いだりして学ぼうとする意欲がある。一度経験したこと、学んだことはよく覚えており、「僕、知ってるよ」「できるよ」と自慢をする姿が見られていた。

今回も、いつもの慣れ親しんだ場所での遊びに自信を示し、勢いよく木登りを始めていった。すぐに木に手足をかけ、登っていった。

<エピソード>

けいじ君は、黙々と木の上に登っていった。上だけを見て、どんどん足を運んでいく。気がつくと、大人の頭のあたりまで登っていた。そして、ふと下を見たけいじ君は、降りることが怖くなってしまったようだ。<どうするかな>と少し離れて様子を伺っていると、考えるようにしてじっと下を見つめていた。「降りられない。できない」と先生に助けを求めた。

だが、中田先生は「自分で降りてみな」と見守る姿勢をとった。けいじ君は「でも…」と少し戸惑っていたが、ゆっくりと降りる方法を探し始めた。いろんな場所に足を運び、降りられる所を探している。何度も降りることを挑戦するが、なかなか降りることができない。そこで森の案内人さんが、「手伝おうか？」と声をかけたが、けいじ君は「いい」と言い、自分で降りることを選んだ。そして、足が安定した場所を見つけると、意を決したようにぴょんと飛び降りた。みんなに「降りれたね」と声をかけられると、「こんなの平気だよ」と得意げな表情で自慢をしていた。

<考察>

けいじ君が、何度も何度も試行錯誤を繰り返し、やりきった達成感から自信をつけていく姿が印象的だった。信じて見守る森のようちえんの保育が、子どもの挑戦する力、考える力、葛藤する力を引き出し、自分の力で乗り越えていくたくましさを育てると実感できるエピソードである。

けいじ君は、最初は「できない」と考え、弱音を吐いていた。<怖いから助けてもらおう>と思ったのだろう。すぐに援助を求めていた。けれど、「自分で降りてみな」と言われ、挑戦する気持ちに変わったようだった。それまでよりも真剣な表情に変わり、足が安定する場所を探していた。手はしっかりと木を握っていた。さらに、バランスが崩れると判断するとすぐに姿勢を戻し、新たな足場を模索していた。けいじ君には、自分で降りる力があったのである。自分で降りよう背中を押されたことで、けいじ君の考える力や挑戦する力が引き出されていると考えられた。そして、やりきった達成感を味わうと同時に、自信が生じたと見て取れた。帰り際には、何度も自分で登り降りを経験していった姿から、木登りができるという自信と一人でやりきる技術を身に付けたことが分かった。

中田先生は、けいじ君の能力や木の高さ、現状を判断し、見守る姿勢を取ったと考えられる。子どもが援助を求めた時、危険だからと助けてしまうことは簡単である。だが、子どもはその後木からの降り方が分からないままとなるのではないだろうか。一方、少し恐怖心を感じながらも必死に降りる方法を探し出す経験は、子どもの力を引き出していく。自分の頭で考え、試してやりきったからこそ、喜びは大きくなると思われる。けいじ君の木登り体験を通して、子どもの力を信じて見守る保育の大切さを実感することができた。

子どもは様々なことを考え、試し、失敗と成功の体験をする中で、自分がどう行動すべきか学ん

でいく。自己肯定感を高めていく。子どもが困難に遭遇した時、すぐに手助けをするのではなく、子どもを信じてあたたかく見守っていきたいと思った。大人に「見てもらえている」という安心感の中で、子どもが思い切り且つ時間をかけて挑戦することができる環境の広がりがある森のようちえんの保育の良さだと思われた。

II 森のようちえん活動の意義

森のようちえんは、現代日本における幼児教育を考え直す契機である。とはいえ、誤解がないように繰り返して述べておくと、もちろん、森のようちえんには、現在の幼稚園教育や保育所保育、認定こども園などの就学前教育（以下では園と記す）への批判が根底にあるわけではない。むしろ、そうした園での一つの可能態として存在している。どこの園でも、森のようちえん活動は、現実的な保育の一部であり、そうでなくても潜在的な可能性である。

以上の七つのエピソードは、森のようちえんではなくても、園で普通に見られる出来事である。たとえば、エピソードの1から3は、保育内容の領域「環境」の内容であり、4は領域「表現」と「言葉」、5から7は領域「人間関係」ないしは「言葉」の内容である。領域「健康」の領域に関するエピソードはないが、それでも、森で体を動かすこと自体が「健康」の内容と通底している。森のようちえんの保育は、通常の幼稚園教育や保育所保育での五領域をほぼすべてカバーしているともいえるだろう。そうした研究に関しては他日を待ちたい。

ごく一般的に言えば、幼稚園や保育所、認定こども園などの就学前教育機関では、長期的な視点で、意図的かつ計画的に準備された環境の中に子どもたちを集めて、一日の（あるいはもっと短い時間の）保育案（指導案）にしたがって子どもたちを教育する。かつて、フレーベル（Fröbel, F., 1782-1852）が創設した「幼稚園（Kindergarten）」の流れをくんでいる日本の幼稚園の大半では、教育者が十分に教育的配慮を払った上でできあがった園庭や保育室で、子どもの発達にふさわしい時期に、ふさわしいものを、教育的配慮から順序良く与えるという視点が幼児教育にある。教育者の大いなる配慮と順序性（カリキュラム化）が大きな特徴である。

しかし、森のようちえんではそれらの特徴がかき消されてしまう。もちろん、指導者らは子どもたちに生命の危険がないか、怪我や事故の可能性がないか、十分に配慮している。また、ある程度の計画性はある。しかし、森に入れば、子どもたちは自由に伸びやかに活動する。そして、予期せざる偶然の出来事が起こり、意図されていなかった遊びや学び、泣き笑いといった感情が次々と起きていく。この点で、森のようちえんという発想は、従来の幼稚園教育や保育の理念である教育的配慮と順序性を再考させる。

しかも、意図的計画的な保育ではなくても、幼稚園教育要領や保育所保育指針にあるような五領域の教育活動が行われていく。以上の七つのエピソードは、森のようちえんにおいても、教育要領に沿った保育ができるということの証左でもある。もとより、七つのエピソードを並列しただけでは説得力がない。そうした批判は甘んじて受ける。だとしても、こうした記述的エピソード法で、森のようちえんの保育を報告することで、その理解を広げる一助となればと願う。

<引用・参考文献>

- ・今村光章, 2010, 保育援助技術の向上を目指した現職教育のあり方を求めて：記述的エピソード法を用いた園内研修の試み, 岐阜大学教育学部 教師教育研究, 第6号, 2010, pp.99-109.
- ・水谷亜由美・今村光章, 2011, ドイツの森のようちえん活動の実践：Waldkindergarten Bensheim.e.Vを訪問して, 岐阜大学教育学部研究報告 教育実践研究, 第13巻, pp.109-118.
- ・今村光章・中京幼稚園・東海第二幼稚園, 2011a, いのちを学ぶ保育のありかたを求めて：記述的エピソード

法を用いた園内研修の試み, 岐阜大学教育学部 教師教育研究 第7号, pp.55-64.

- 今村光章, 2011b, 行事型「森のようちえん」の実践とその意義, 関西教育学会 年報通巻第35号, pp.111-115.
- 今村光章, 2011c, 森のようちえんとは何か: 用語「森のようちえん」の検討と日本への紹介をめぐって, 日本環境教育学会, 環境教育, 21 (1), pp.59-67.
- 今村光章・水谷亜由美, 2011d, 「森のようちえんの理念の紹介: ドイツと日本における発展とその理念を手がかりに」, 日本環境教育学会, 環境教育, 21 (1), pp.68-75.
- 今村光章・浅野教史・高橋聡, 2013, 記述的エピソード法を用いた園内研究会のシステム構築を目指して: 保育援助技術の向上のために, 岐阜大学教育学部 教師教育研究 第9号, pp.83-93.